

三浦綾子論（四）—『ひつじが丘』—

A study of Ayako Miura(4) — "Hitsuji Hill" —

* 小田島 本有

Motoiari ODAJIMA

「奈緒実、お前自身、幾度も幾度も人にゆるしてもらわなければならない存在なんだよ」

耕介は娘にこう語った。

杉原良一との結婚に懸念を示す両親に反発し、「わたしだって、人一人ぐらい愛することができるとまで言い切って、函館での新婚生活を始めた広野奈緒実であった。しかし、豹変した夫の裏切りや暴力に耐えかね、彼女は両親のいる札幌に戻ってきたのである。

家を飛び出す前、耕介は「愛するとは、ゆるすことでもあるんだよ。一度や二度ゆるすことではないよ。ゆるしつづけることだ」とも娘に語っていた。奈緒実は今になってようやく父親の言葉の重みをひしひしと感じているのである。

『ひつじが丘』は一九六五年（昭和四十年）八月から翌年十二月まで、雑誌「主婦の友」に連載された。

この作品では、「愛する」ということが「ゆるす」ということとほぼ同義として使われている。前作『氷点』で、自殺を試みる辻口陽子が遺書の中で、「ゆるしがほしい」と述べていたことも思い合わせるべきだろう。

冒頭に引用した言葉は、父耕介が娘の奈緒実に語りかけた、いわば他者コミュニケーションであった。しかし、この言葉には、耕介が自らに語り聞かせる自己コミュニケーションの要素も内包されていたのである。

かつて耕介も妻の姉と過失を犯した過去があった。そのとき妻愛子が語ったのは、「わたしは神と結婚したわけではありません。人間と結婚したのです」というものである。愛子はクリスチャンだった。自分の夫が姉と関係し、子供を宿した

という事実を知らされ、愛子の心が大きく揺れ動いたであろうことは想像に難くない。それでも彼女は「ゆるした」のである。葛藤の末にこのような発言をした愛子の心の内が痛いほど分かるからこそ、耕介はそのことに対して感謝した。そして、その愛子に少しでも近づくべく耕介はキリスト教を学び、牧師となったのである。

耕介が奈緒実に「ゆるす」ことの大切さを訴えていたとき、彼には切実な体験の裏付けがあった。愛子に「ゆるされた」ことへの感謝の気持ちがあるから、彼は娘に強く訴えずにはいられない。それは妻から受けた大切なものを今度は娘に伝えたいという、彼なりの強い願いでもある。しかし、その思いがなかなか娘に伝わらない。そのもどかしさが、「ばか者！ 思いあがって！ これだけ言っても、わからないのか！」という、耕介にとつては珍しい興奮を生むことにもなるのである。

「愛する」とは単なる感情だけの問題ではない。非常に意志的な行為である。これは、遠藤周作が『恋愛とは何か——初めて人を愛する日のために——』（角川文庫、昭和四十七年二月）の中で、「愛」と「情熱」とは違う、とさかんに述べていたことも通じる。

しかし、耕介の訴えも奈緒実には伝わらなかった。奈緒実は夫の良一を愛すること、すなわち、本当の意味で「ゆるす」ことが最後までできなかった。彼女がそのことを痛感するのは良一の死後である。

『ひつじが丘』は「愛する」＝「ゆるす」ことの意義を正面から問いかけた作品だと言えよう。

作品の冒頭で、広野奈緒実は函館のT高校から札幌北水高校に転校してきた美貌の少女として登場する。クラスの誰しもが注目するなか、担任の竹山哲哉が紹介しようとしたとき、彼女は自分が牧師の娘であることを知られまいとした。

ここには彼女なりの親に対する反抗があったと言えよう。彼女の両親は奈緒実を大人として尊重しようとした。その結果、彼女は両親に叱られるということがなかった。彼女の場合、叱られないというのは決して良いことではなかった。なぜなら、それは自分が両親に十分かまってもらえないことを意味していたからである。そして、彼女自身十分には自覚していなかったことだが、そこには自分が両親に甘えることができないことに對する不満があった。しかし、土居健郎が『「甘え」の構造』(弘文堂、昭和四十六年)の中で述べているように、反抗することもまた「甘え」の一つに他ならない。

その点で、授業中にノートも取らずに窓の外を眺めてばかりいる態度を叱責した竹山は、はじめて奈緒実と正面から向き合った人間だった。竹山は思わず奈緒実の頬を殴ってしまったこともあったし、学習態度を改めるよう率直な言葉で綴った手紙を夏休み中に送ったりもしていた。このストレートな態度に頑なだった奈緒実の心が開かれたのは事実である。だが、この時点で、奈緒実にとって竹山はあくまでも頼りになる学級担任であり、異性の対象ではなかった。

両親に対する反発の気持ちがあくすぶっていた頃、奈緒実の心の隙間にすつと入り込んだのが杉原良一である。彼は奈緒実の同級生京子の兄だった。

良一は出会った当初から奈緒実の美貌を称え、「好きだ」と、思いをストレートにぶつけてくる。良一の澄んだ目や、このような態度は、奈緒実の目には純粹さ、子供っぽさと映った。奈緒実はかねてより子供のために童話を作りたいという夢を抱いており、良一のような態度を安易に受け入れてしまう土壌があったのである。そこに彼女の落とし穴があった。

奈緒実は良一が純粹に見えることを、彼が自分に忠実であることの表れであると解釈した。「良一さんのように純粹なのが好きな」という奈緒実の言葉に対し、母の愛子は「あなたという自己に忠実って、感情に忠実ということね」と言葉を返している。この愛子の言葉は注目されてよい。黒古一夫は奈緒実のこの時代の考え方に排除の論理があり、「相手を生かすゆるしつづける」愛とは正反対

だという指摘をしている(『三浦綾子論——「愛」と「生きる」こと』の意味)、小学館、平成六年六月)。

両親はもとより、良一の友人である竹山も二人の交際を歓迎しなかった。周囲が良一を評価しないことに反発し、奈緒実が良一に對して「義憤めいた愛情」を抱くようになる。良一はもつと愛されていいはずだと思う奈緒実は、周囲の無理解を感じれば感じるほどますます良一に傾斜していくという、悪循環に陥ったのであった。

奈緒実が冷静に良一を見極められるチャンスは幾つもあった。

奈緒実が京子の家に電話を入れたところ、電話に出たのは良一だった。奈緒実にすぐにでも会いたい彼は、妹の京子について、「今日も竹山と映画に行ったんじゃないのかな」と嘘をついている。この日教会で顔を合わせた竹山との会話の中で、竹山が京子と映画には行っていないことが明らかとなった。良一が簡単に嘘をついていることを、この時点で奈緒実はしつかり受け止めることはできずだった。しかし、おそらく良一に心惹かれ始めていた彼女にとって、良一のついた嘘もむしろ好意的に捉えられていたのかもしれない。

娘を心配した両親は、奈緒実の担任である竹山をわが家と呼ぶ。良一と友人関係にあることを知った両親は、竹山から良一の人となりを聴きたいと思ったのである。

良一と竹山は確かに友人であったが、その関係は決して対等なものではなかった。いつも女性関係で良一は問題を起こし、その尻拭いの役を竹山は務めてきた。しかも厄介なことに、竹山もまたこの奈緒実に心惹かれていたのである。

良一のそれまでの行状を暴き立てるのは簡単だった。しかし、そうすることを竹山は潔しとしなかった。竹山は良一について何も語れない状態になったのである。両親は竹山の態度から無言のメッセージを汲み取った。もし良一が信頼に足る人物であるならば、竹山はそれを素直に語れるはずである。それができないということは、良一はやはり問題を抱えた人間だということになる。

しかし、奈緒実にはこの竹山の態度が不満だった。友人であるならば、あの場面でも良一のことを褒めてくれればよかった、というのが彼女の言い分だったのである。彼女は竹山の無言の態度の内なるものを推測することができなかった。それだけ良一に心が傾いて、盲目であったのだ。

『ひつじが丘』では、コミュニケーションがしばしば噛み合わない状況が描かれているが、なかでも「大人」と「子供」はその状況を支えるキーワードとなっている。

奈緒実から見た良一は、「子供のような純粋な感じの人」であった。ここには、良一を偽善も偽悪もない、素直な人間と捉える肯定的な評価があった。

「わたし、あの人なら信じられるような気がするんです」

竹山はちよっと、だまって何か考えているようだったが、

「杉原はいい男ですよ。しかし……」

言いかけて竹山は口をつぐんだ。今、奈緒実が話し合える良一を見いだして、別人のように快活になっている。それでいいではないかと竹山は思った。

快活になっている奈緒実を前にして、竹山は口をつぐんでいる。「しかし……」の後に言いたかったものに奈緒実は全く気づいていない。

ここに奈緒実の限界がある。

彼女は「愛」を観念的にしか捉えられず、それが現実の生活の中で試されるものであることを知らなかった。

そして、言葉その表現されたものでしか受け取ることができなかった。彼女にとって、言葉にならない言葉は理解の埒外にあったのである。

竹山は奈緒実に対し、「杉原って、君の思っているほど子供じゃないよ」と伝えていた。彼は別の日にも同様のことを口にしていく。それでも、彼は友人である良一の過去を暴くことができなかった。しかし、一度ならず二度までも竹山が念を押すように語ろうとしたことの真意を、本来奈緒実が気づくべきだったのである。父の耕介も、良一を「子供のような方」と評する娘に対し、「そうか、子供のような人か。だがおとうさんには、そうは見えなかったね」と述べていた。竹山の言葉と耕介の言葉は明らかに符合していたのである。

だが、肝心の奈緒実はどうだったか。

良一は奈緒実をふり返ると、大きく深呼吸をして微笑した。あの人なつつこ

い良一特有の微笑だった。奈緒実はふと竹山の言葉を思い出した。竹山は良一を子供ではないと言った。それはもしかしたら、良一という人間は子供に見えるところはあっても、芯はしっかりした大人だから、結婚を申し込まれたら安心して受けなさいということではないかと、奈緒実は思った。

奈緒実は自分に都合のいい解釈をしてしまった。後日、竹山が「やつぱり君は子供だよ。結婚なんか早いんだ」と述べたとき、奈緒実が「まあ、失礼ね」と反論する。これを受け竹山は、「しかし君が大人なら、もつと杉原という人間をよく見ることだね」と忠告してもいた。

奈緒実には、自分が子供扱いされることへの反発があった。その思いが強いゆえに、彼女は両親の前で「わたしだって、人一人ぐらい愛することが出来るわ」と豪語する。これは彼女の驕り以外の何ものでもない。一人の人間を愛し続けるということが困難なのである。後に彼女は、この時の自分の言葉がいかに浅はかなものであったか、身をもって実感することになるのだ。

四

『ひつじが丘』を執筆するに際し、作者の脳裏にはおそらく夏目漱石の『こゝろ』があった。友人同士の男性二人が一人の女性に好意を寄せるという構図はもちろんのこと、一方が先に思いを打ち明けたことによりもう一方が沈黙を余儀なくされるという点でも、両者は酷似している。

竹山は奈緒実が短大を卒業してからプロポーズをしようとして心に決めていた。その点で彼は極めて常識的な人間だった。その彼の前で、奈緒実と結婚したいと宣言したのが良一である。奈緒実に対する良一の執着心は殊更強く、「あの人だけは、たとえ竹山にだって俺は絶対にやらないよ」と言い放つ彼の目は、血走ってギラギラと「けものめいた光」を放っていた。これはそれまで奈緒実の前では決して見せない姿であった。

しかし、短大を卒業するまでは自分の思いを抑えておこうとしていた竹山も、良一の行動で軌道修正を余儀なくされた。良一との結婚をめぐる奈緒実と両親との間で話し合いが行われていた頃、竹山は両親に奈緒実との結婚を申し入れる。奈緒実はその事実を両親から知らされた。てっきり京子と付き合っているものと

思っていた竹山が自分にプロポーズしたという事実は、奈緒実には不快感しかもたらさなかった。彼女には竹山が二股をかける(不潔な男)に感じられたからである。このとき奈緒実には、自分の思い込みから竹山を判断してしまった。竹山の心の内を推し測るだけのものが彼女にはなかったのである。

ところで、この作品において、竹山と良一との関係はどのようなものだったのか。それまでの経緯を見ても、二人の関係は決して対等なものではなかった。いつも問題を起すのは良一であり、その尻拭いをしてきたのが竹山である。そのような関係を竹山が絶つてしまうこともできたはずだ。

しかし、竹山はそうしてこなかった。女性関係の始末も竹山に委ねていたくらいだから、良一に竹山に対する「甘え」があったのは言うまでもない。竹山はいわば面倒なことを押し付けられていたのだが、その中で自分は良一よりも上なのだという思いを抱いていたのである。つまり、高校教師でもあった竹山は、自分と良一との関係を、教師と手のかかる生徒とのそれになぞらえていたとも言えよう。これは多少なりとも竹山の自尊心をくすぐるものがあった。確かに迷惑をこうむったという事実はある。しかし、自分が良一に頼られているという実感は決して不快なものではなかった。逆説的にいえば、自尊心を維持するために竹山は良一を必要としたのである。

一方、良一に目を向けた場合、彼がもともと共産党員であり、先輩の獄死に恐怖を覚えて転向した体験の持ち主であったことが書かれている。彼には裏切者、卑怯者の自覚があった。実際仕事で室蘭を訪れる必要があったとき、昔の同志に会ったりはしないか、びくびくしている良一の姿を作者は書き込んでいた。彼が酒と女に溺れるようになった大きな要因の一つにこの転向体験があった。この辺の人物造型は太宰治あたりをモデルにしているのかもしれない。

酒と女に溺れるということは逃避行動だった。良一は自分の弱さと正面から向き合おうとはしない。そのことは、自分を強くなるためのきっかけを掴めないということでもある。そもそも自分はなぜ左翼運動に関わろうとしたのか。その根本の問題まで彼は考えなければならなかったはずである。つまるところ、自分の本質を見つめるということをやめてしまっていた。

彼は次から次へと女性を変える。ここには、女性たちと刹那的に関わる一時の楽しみはある。彼女たちを長く「愛する」という精神はもとより欠如していた。彼がこうせざるを得なかったのは、女性と本質の部分で関わることを彼がひ

そかに恐れていたからに他ならない。彼女たちと深く関わり、自分の本質が紛れようもなく露呈されるからである。だが、女性たちとの関わりにおいても、裏切者、卑怯者という、根本のところでの自覚は何ら変わることがなかった。その最後のみじめな姿を良一は相手の女に目の前で晒すことなく、その任を竹山に委ねていたにすぎない。

だが、奈緒実と出会ったときの良一はそれまでとは違った。それは友人の竹山にも感じられたことだった。良一は奈緒実と関わることで自分を変えようとしたのである。本来はまず自分が変わらなくてはならない。良一は自己変革のために奈緒実を利用しようとした。これは本末転倒である。後日、「兄はほんとうに奈緒実さんによって立ち直ると信じていたんですもの」と、竹山に語っていた京子も同様である。

だが、奈緒実と一緒にいても良一は変わらなかった。彼は自分に自信が持たない。それが彼女との生活の中では現れてこざるを得なかったのである。その典型的な例は、英語の研究会のため函館を訪れた竹山から連絡を受け、彼に自宅へ来るよう話しておきながらなかなか帰宅しようとせず、部屋に奈緒実と竹山を残したままにしたことである。良一は奈緒実と結婚生活を始めたものの、家には家財道具すら揃っていない。その部屋を竹山が目にしたらどう思われるだろうと想像すると、良一の足はなかなか自宅に向かわないのであった。

なかなか良一が帰ってこないなか、竹山と奈緒実が食事を始めることになるが、このとき奈緒実には良一との生活の中では味わえない喜びを感じていた。一つは食事の前に、竹山が「祈りましょうか」と提案し、二人で祈りを捧げたこと。もう一つは、奈緒実が作った料理を竹山が「おいしい!」と言ってくれたことである。いずれもささいなことだが、それらを貴重な喜びと感じられるほど、奈緒実は日頃の生活が満たされていなかった。奈緒実の脳裏に(わたしは、先生のような人と結婚すべきだったんだわ)との思いが浮かんだ。このとき彼女は、竹山を一人の異性として強く意識するようになるのである。

良一は新聞記者をしていたが、もともと絵を描きたいと願っていた男である。芸術家としての自負もあった。彼にとつていい絵が描けることがすべてであり、その実現のためには自分のわがままはゆるされることを要求し、すぐにかなえられないと知るなり力づくでもそれを実行しようとする。そのようにして衣服を剥

がされていった奈緒実がみじめな思いになることなど、良一にとってはどうでもよいことであった。彼には芸術家であることがすべての行為を正当化する根拠となるのである。

そして、良一のがままは、京子や奈緒実のかつての同級生であり、京子をはじめていた川井輝子と関係を結ぶことへとつながっていく。

五

在学中、川井輝子は杉原京子を「パンパン屋」と呼び、いじめを行っていた。京子はなぜ自分がそのような仕打ちを受けなければならないのか、その理由が自分からなかったのである。しかし、転校早々の奈緒実はいじめの輝子の目に涙が光っているのを見逃さなかった。

作品を読み進めていくと、輝子の父親が妻子のいる身でありながら京子の母と深い仲になっており、そのことで川井家の中がずさんだ状況になっていたことが明らかになる。

輝子には、自分たちが京子の母によって家庭内を荒らされた被害者であるとの思いが強かった。そのため京子を呪っても当然だという意識が輝子には根強くあったのである。輝子は自分の容貌にも自信を抱いていた。そこへ美貌の奈緒実が転校してきた。その奈緒実が京子と親しくなったのであるから、奈緒実に敵意を抱くのはある意味で自然な流れであった。

その輝子が京子の家に乗りこんだ際、顔を見知っていた良一が彼女の兄であること、そして彼の妻が奈緒実であることを知った。以前から輝子に関心を寄せていた良一は、巧みに輝子を口説き、彼女と肉体関係を持つてしまう。輝子も良一といったん関係を持つたことで、彼に対する執着心を募らせていくのである。

輝子はもともと、夫をよその女性に奪われた母親に同情していた。しかし、ひとたび良一と関係を持つてから、彼女はあれほど嫌っていた京子の母親と同じ立場に身を置くことになる。彼女は全くそのことを意に介していない。そこには一方で良一の妻である奈緒実に対する競争心もあった。立場が変わると全く自分が見えず罪悪感を覚えない。人間とはまさに不可思議な存在なのだ。このようにして、輝子は被害者から加害者へと容易に転じた。ここに人間の業の深さがある。

輝子は良一に一つのことを約束させた。それは彼女が会いたいと思うときは良

一が会うということである。奈緒実が札幌の実家に戻り、彼女を追うように良一もそこを訪れた。そして、奈緒実の両親は彼を受け入れた。その頃、良一は嗜血する。輝子は良一の容体がすぐれないという話がにわかには信じられず、奈緒実の実家に押しかける始末である。このように輝子の身勝手さはとどまるところを知らない。

しかし、そのような中で、良一に少しずつ変化が現れ始める。奈緒実の両親はそれを感じ取った。両親が寛容な姿勢を見せるのに対し、今までさんざん傷つけられてきた奈緒実はそのことを信じることはできない。最後の最後まで良一に対して奈緒実の心は閉ざされたままだったのである。

「奈緒実、函館に帰りたいなあ」

しばらくして良一がしみじみと言った。

「え？ 函館に？」

（略）

「わたしは函館より札幌の方がいいわ」

あの函館での良一との生活に、ふたたびもどりたいと奈緒実とは思わなかった。毎日のように良一は酒を飲んで遅く帰り、いらいらとして奈緒実に辛く当たった。つきさすような冷たい言葉を、いく度良一は奈緒実に投げつけたことだろう。あの頃の生活の何が面白くて、良一は函館をなつかしんでいるのかと奈緒実腹立たしかった。

「奈緒実、札幌の方がいいの？」

良一は淋しそうに笑った。

「函館がなつかしければ、あなた一人でお帰りになるといいわ」

良一からのメッセージはこのとき奈緒実の一言で遮られてしまったのである。結果的に二人の最後の会話となった場面もそうだ。クリスマス・イブの日に会いたいとの電話が輝子からあり、良一は難色を示す。輝子との縁を切りたがっている彼に、きちんと会ってケリをつけた方がいいと促したのは耕介だった。家を出るとき、良一はふるしき包みを提げていた。

「それは何のですの？」

「ウイスキーだよ」

車に片足をかけたまま、ふり返って良一は答えた。

「まあ！」

奈緒美は自分でも、どんなにけわしい表情を見せているかがよくわかった。車が動き出し、良一が片手をあげた。しかし奈緒美は手をあげなかった。ウイスキーをぶらさげた良一は、いかにも輝子のところのこのこと遊びに出かけて行ったという印象だった。

これが良一を奈緒美が目にした最後であった。なぜなら、良一は川井輝子がひそかに入れた睡眠薬のため、帰る途中雪の中で凍死してしまったからである。

この引用場面で奈緒美は完全に誤解をしている。良一が提げているウイスキーは、輝子とこれからクリスマス・イブを楽しむための差し入れだと、彼女は判断してしまった。尋ねられたとき、良一が「ウイスキーだよ」としか言わなかったのであるから、彼女の誤解も無理からぬところがあった。良一は言葉不足だったのである。

このとき、良一が、このウイスキーはかつて輝子からもらったものであり、彼女と別れるに際してこのウイスキーも一緒に返すつもりであることを告げていれば、事態はもつと違っていたかもしれない。それまでの放蕩とは絶縁するために、良一はずっと酒を断っていた。輝子からもらったウイスキーの栓が開かないままになっていたのも、そのためだったのである。良一の言葉不足が奈緒美の誤解を生んだ。もし奈緒美が良一の更生ぶりをしっかりと把握できていたのであれば、違った展開になっていただろう。「早く帰ってくるからね」と言う良一に彼女が返した言葉は、「どうぞ、ごゆっくり。何ならお泊りになってもよろしいのよ」というものであった。この言葉を良一はどう聞いたのであろうか。

六

良一の変化の兆しを感じ取っていた一人が竹山であった。輝子が良一のもとを訪れ、そこに居合わせた竹山と三人の会話が行われたときである。聖書など読んだこともない良一が、先日ルオーのキリストを見ていたら、このキリストと自分が無縁の人ではないという実感に捉われたという。

「痛みつていのかなあ、あわれみつていのかなあ。あのルオーのキリストは……。あれを見ていて、なんだか深い慰めを感じるんだ。ふいに真善美という言葉思い出してね。真理イコール善イコール美であるなら、これこそ美だという気がしたんだ。そしたら、俺のかく絵は一体何だろう。いらいらしながら、鋭く尖った神経で捉えたつもりの美が、一人の心に何を訴えることができるだろうとそう思っちゃってね」

竹山は良一のこの変化を、彼と奈緒美との愛情が深まっているためと解釈した。自分がもうそこに割り込む余地がないものと感じ、自分を思い続けてくれている京子に向き合わねばならないと、竹山は考えたのである。

以前の良一は自分が芸術家であるという自負心から、自らのわがままな行動を正当化していた。芸術は自我の主張だと考え、「鋭く尖った神経」で美を捉えることが何よりも必要だと信じていたのである。そこには自我の主張はあつたかもしれない。しかし、受け手に対する顧慮は全くなかった。今まで自分がこうあるべきと思っていた芸術が果たして人に訴える力を持つのかという疑問にぶつかったとき、彼は根本的に自分を変えるきっかけを掴んだのだ。ルオーの絵を見てそこに「深い慰め」を感じたことで、良一は芸術の鑑賞者の視点をはじめ得た。

良一は輝子の家から帰る途中睡魔に襲われ、冬の路上で凍死する。そして遺されたのは、彼の描いた絵であった。

白布がとりはらわれ、その絵が画家にかけられた時、一斉に人々の口から嘆声があがった。

十字架にかかったキリストから、血がしたり落ちていた。その十字架の下にキリストの血を浴びてじっとキリストを見上げている男の顔、それはまぎれもなく良一の顔ではなかったか。

泣いているような、悔恨に満ちたその良一の目はまっすぐに十字架のキリストを仰いでいる。それを見おろすキリストの何と深いあわれみに満ちたまなざしであろう。その溢れるような慈愛の目は、見る人の心を慰めずにはおかないほどあたたかかった。

「そうか……そうだったのか」

耕介はそういつたかと思うと、こらえかねたように、良一の体をかきいだいた。

（そうだったの。あなたは……）

良一は、

「君が何と言ってくれるか、それだけが楽しみなんだ」

そう言って輝子の家に出かけて行った。良一はイエスの方に手をさしのべて、ゆるしを乞いながら、そしてそのゆるしを信じて死んで行ったのだと、奈緒実は思った。

（でも、わたしはあの人と輝子さんのことを決してゆるしはしなかった）

奈緒実は絵にじっと目をそそぎながら、刺しつらぬかれるような心の痛みに耐えていた。

こんなにも人を激しくゆすぶることのできる絵が、この世にあることを奈緒実には知らなかった。それは良一が死んだためかもしれない。だが、決して、それだけではないような気がした。奈緒実もまた、この絵の良一と並んで、十字架のキリストにあわれみを乞いたい思いであった。

「立派な……信仰告白だ」

耕介が感動に満ちた声でつぶやいた時、奈緒実は良一にしがみついて、はじめて声をあげて泣いた。

（ゆるして……）

奈緒実は、一晩中良一に向かってそう叫びつづけた。良一は知らぬ間に自分よりずっと高い境地に生きていたことを、奈緒実はいまやつと知ることができた。

自分の才能を誇示することにあくせくしていた頃の良一には、いつも他の画家に負けられないという焦燥感ばかりが頭を占め、自己そのものを見つめる心の余裕が失われていた。彼がしばらくの間思うような絵を描けなくなるのは、ある意味で必然的なことだったのである。

良一はこの作品において、二つの転向を体験している。一つは左翼運動からの転向、もう一つはキリスト教への接近である。彼はクリスチャンになったわけではない。しかし、それまでの生き方を悔い改め、「ゆるし」を求めてキリスト教に近づいていったという点では、これもまた一つの転向であった。

『ひつじが丘』は、良一の足跡に即して眺めた場合、一芸術家の再生物語と解釈することができるだろう。それは良一の死と引き換えに実現されたものではあったが、彼は魂の彷徨を続けていく中でしっかりと自分にふさわしい題材に逢着し、それを具現化していったのである。以前の彼は裏切者、卑怯者の自覚におのき、そこから逃げていた。しかし、彼はそれらとしっかりと向き合うようになったのだ。その発見は、彼が過去の自分を直視し、周囲に迷惑をかけつばなしだったわが身をひたすらゆるしてほしいと願う境地に達したことによって可能になった。なお、この作品の下敷きとして、『新約聖書』の「ルカによる福音書」十五章のいわゆる「放蕩息子」の物語がある、と指摘したのは森下辰衛の『ひつじが丘』論であった（『福岡女学院大学紀要 人間関係学部編』第五号、平成十六年三月）。

芸術はまさに魂の表現なのである。自己を喪失した主体からは豊饒な芸術作品は生まれえない。自己閉塞した芸術は他者との通路を絶たれ、人々の心を動かすことは不可能だ。主体喪失によって制作不能となった芸術家が自らを回復すべく彷徨を続け、再び豊饒な芸術主体を獲得するに至るまでの過程を描くことで、三浦綾子はたんなる芸樹家小説の枠に納まらない、普遍的な人間のありようを浮き彫りにした。そこには、福永武彦や辻邦生の文学と同質のものを見出すことができるだろう。

七

輝子は良一の訃報に接し、「わたしは殺した」と半狂乱になった。良一を睡眠剤で眠らせ、自分の家で一夜を共にできれば彼との関係が続けられる、という思いが輝子にはあった。その安易な考えがとんでもない結果を生むことになったのである。輝子は人間の愚かさを象徴的に示すものとして描かれた人物と言えよう。そして、竹山も敗北感を味わっていた。作品の後半では卑小な竹山の姿が露呈されていく。奈緒実に対する未練を断ち切るべく京子の唇を奪い、これでいいんだ、と自ら納得させたはずの彼であった。しかし、いざ京子との婚約が整うと、わざわざ奈緒実を呼び出し、自分の心の迷いを訴える竹山であった。このとき、竹山は奈緒実から、「つまり、先生は京子さんと幸福な結婚をなさりたくて、胸の中にたまっていたもやもやを吐き出したというわけですね」と批判されてい

る。

作品の前半では、信頼のおける教師として認められていた竹山であった。しかし、その一方で竹山には優柔不断な性格が同居しており、思い切れない弱さがあった。それが作品の後半では露呈されている。

奈緒実からの厳しい言葉、さらに良一の遺作となった絵を通して、竹山は自分のみじめさを痛感している。それまで彼が良一を見下ろす地点に立っていたことは否定できない。しかし、いつしか二人の立場は完全に逆転していたのだ。

『ひつじが丘』において、絶対化されている人間は誰一人としていない。それはまさに我々読者がそうだとということでもある。

良一の死、そして遺作は多くの人々の心を大きく揺り動かし、奈緒実が父親が園長を勤める学園で働きながら、不幸な子供たちの保母を目指すことを決意する。これは亡くなった良一が必ずしも恵まれた家庭環境におかれていなかったことが影響している。それまでは「与えられる」ことばかりを求め、それが満たされないかと相手を恨んだり、憎んだりすることしかできなかった奈緒実にとって、これは大きな変化であった。彼女は今こそ自ら「与える」側に立とうとしている。その彼女にとって悔やまれるのは、良一をゆるすことなく終わってしまったという事実である。とりわけ、最後の場面で良一がこちらに向かって片手をあげたにもかかわらず、彼女はそれに応えようとしなかった。良一が亡くなった今、彼女は改めて自分の頑なさ、冷淡さを悔いたことであろう。

三浦が描きたかったのは、自らもゆるされるべき存在でありながら、そのことに意を介することなく、他者をゆるそうとしなかったことで、一生の後悔を刻印してしまった人間の姿であった。原罪が誰にもあるものならば、人は知らず知らずのうちに罪深い行為をしている。ゆるし、ゆるされる関係とはそういう人間が心がけなければならない必須の事柄である。しかし、罪深い我々はいつしかそのことを忘れてしまう愚かな存在でもあるのだ。

『氷点』のテーマは原罪である、とは作者自身の言葉である。しかし、作品そのものは原罪がいかなるものか、十分に語り尽くしたとは言い難かった。

ゆるしが欲しいと願い、そのことを遺書の中で述べながらその行為を直接面と向かってできなかった陽子にとって、昏睡状態から覚めた後、次なる課題は自らゆるしを乞う行為をすること、さらには相手を心からゆるすことである。奈緒実の後悔を描き切ったとき、三浦は陽子の目指すべき方向性を確実に掴んだ。

作者自身、自伝でも述べているように、「陽子」という名前は幼くして亡くなった作者の妹の名前でもあった。たった六歳で他界した妹と同じ名前の子を再び作品の中に甦らせるにあたり、作者の心には、陽子には奈緒実のような後悔をさせたくない、という強い思いが込められていたはずである。ここに『続氷点』を執筆する土台が固まったのであった。

この作品の結末では、羊ヶ丘の展望台を訪れた竹山と奈緒実の姿が描かれている。この作品のタイトルはこれに由来するものと思われるが、タイトルは「ひつじが丘」であって「羊ヶ丘」ではない。後者であれば、それはあくまでも札幌の地名を表すものでしかない。

二人の前には羊の群れがあり、二人は漱石の『三四郎』に登場する「迷える小羊（ストレイシープ）」という言葉が話題になっている。我々がみなストレイシープである。それを示す意味でも、タイトルは地名の「羊ヶ丘」ではなく「ひつじが丘」である必要があったのだ。